



# 退屈男



川崎ゆきお

「退屈はいいのですよ」

「ほう」

「平和な証拠、平穏な暮らしぶりだということです」

「だから、退屈はいいと」

「退屈はやはり、退屈なので、いいものじゃないですが、いつもの日常の動きができなくなったとき、有り難みを感じますねえ」

「それは分かっているのですが、やはり退屈だと刺激が欲しい、何かアクティブなことがしたくなります」

「しますか」

「しません」

「また、どうして」

「だから、何かしてもいいという自由度があるだけで、もういいのです」

「じゃ、退屈でもいいと」

「退屈はいけませんよ。しかし、退屈できる仕合わせがあります」

「ああ、あなたの方が退屈について詳しい」

「いえいえ、普段からあまり退屈はしていませんから。一日結構忙しく過ぎていきます。時間が足りない、もう少しゆったりとやりたいほどです」

「お仕事をされているのですか。私はもう定年からかなりなるので、退屈男をやってますよ」

「ああ、旗本の」

「そうです。あれは殿様の直属部隊でしょ」

「だから、旗本です。本陣の大將を囲んで、守っています」

「しかし、江戸になってから戦らしい戦はない。将軍様が出陣するようなこともない。旗本などやることがない。だから退屈する。それで出て来るのが旗本退屈男です」

「はいはい」

「しかし、旗本がいくら退屈していても戦は起きないし、起こらない。旗本なのでただの家来だ。しかも一番忠実な直参」

「それより、退屈されていないでしょ。あなた。そのコツ、教えて下さい。私は退屈の良さは頭では分かっているし、たまに寝込んだりしたとき、いつもの日常ができないので、退屈な日々

の有り難みを思うのですが」

「さあ、何でしょうなあ、やるのが結構ありましてねえ。大したことじゃなく、個人的なことですが、それで忙しい。日常のこともほったらかしにして、やるべきことも出来ていなかったりする。例えばゴミの日に出すのを忘れるとか、分かっていますよ。今日はゴミの日だと言うことを、しかしその数分の手間がいやなんです。まあ、次のゴミの日に纏めて出せば良いと思う。それにゴミ袋はまだ半分にもなっていない。これで捨てるのはもったいない。ゴミがもったいないのじゃなく、ゴミ袋がもったいない」

「何故そんなに忙しいのですか」

「戦いです」

「ほう」

「レジスタンスです。村兵に志願し、戦っています」

「あなたそれ、現実じゃ」

「ないです」

「何ですかそれは」

「兵士として忙しい」

「ゲームかね」

「そうです」

「あああ」

「私は臆病なので、弓兵です。最近レベルアップして、長弓を引けるようになりましてねえ、これはさらに遠くからでも攻撃できる。敵が刀をかざして近付いてくる間に倒せます。ライバルは魔法使いですが、射程距離は弓と互角。だから、長弓でないと魔法使いとは戦えない。それをマスターしたので、優位になりました。これからです。私の活躍は」

「あのう」

「何ですか」

「いや、いいです」

了

